大分の史跡－高瀬石仏－

高瀬石仏は、霊山のふもと、大分川支流の七瀬川の右岸に位置し、高さ約 1.8m、幅約 4.4m、奥行約 1.5m の石窟状に掘り込まれた岩壁に、5 体の仏像が彫られています。県内の他の摩崖仏とは異なった様相を示す貴重な作例で、昭和 9 年（1934）に国指定史跡に指定されました。

深沙大将立像

大威徳明王坐像

胎蔵界大日如来坐像

如意輪観音坐像

馬頭観音坐像

高瀬石仏の尊像

向かって左から、深沙大将立像、大威徳明王坐像、胎蔵界大日如来坐像、如意輪観音坐像、馬頭観音坐像の順に彫り出されています。石窟の中に掘り出されているため、朱色で彩られた色彩も良く残っています。中央の大日如来坐像は、ほぼ丸彫りに近い厚肉彫りです。

高瀬石仏は、諸悪煩悩を取り除いたり、怨敵降伏・仏法保護などの祈願修法の対象として造られたもので、全体を通しての温和な表情や浅い彫り口などから平安時代末期頃の作と考えられています。

高瀬石仏周辺

三蔵法師を守護した仏教神－深沙大将－

高瀬石仏の中でも注目される深沙大将立像は、炎髪を逆立て、額と胸の首飾りに髑髏をつけ、腹部には童女の顔が描かれ、左手及び両足に蛇を巻きつかせています。

深沙大将は、唐の僧玄奘三蔵が天竺に赴く途中、砂漠で守護した神とされています。般若経守護の十六善神の中に玄奘とともに描かれることが多く、一般的な姿は、髑髏の首飾りをつけ、左手に青蛇を握り、右手は肘をまげて胸の前に掌をあてています。深沙 大将が彫像として造像される例は珍しく、大変貴重です。

一茎三尊仏

石窟の外、右側の崖面に、各像が座る蓮台がいわゆる一茎三尊の形式でつながった三尊像を浮き彫りにした 磨崖仏 が残されています。一茎三尊形式の三尊像は白鳳時代（7世紀後半から8世紀初め）に金銅仏や押出仏などで多く造られたもので、豊後では平安時代末期になっても造られていたことがわかり、大変貴重です。